

サイ・テク 知と技の発信

【355】

埼玉大学・理工学研究の現場

■教員と学生の方向性

1980年代を高校生として過ごし、18歳の私、勉強好きではあり「すごい」と言われていた気がして、今の私が昔の私に直接話します。そんなことを言われる高校生も両者の意見は平行線のまま生って息苦しいなあと感じてきたと思えます。

と、このあえすは勉強と答えるけど、かなり恵みましたが、二十歳を越えた頃に不治の病と言われている超えた頃と言われている



はせがわ やすひろ 1971年生まれ。99年3月総合研究大学院大学修士(工学)。埼玉大学大学院助手を経て、07年4月より同校准教授。専門は、エネルギー変換、熱電気物性、ナノ加工。

大学教育って何だろう

長谷川 靖洋 准教授

る今で言う「中二病」が完治し、学問の面白さに気づき、大学教員になりました。一般的な大学教員は、大学は自らの研究を進める場所であると認識している一方、大所であるところからすると、高校生からすると教育を受ける場であり、両者の方向性が一致していないと最近感じています。昔も今も、同じです。

きました。大学は、あくまで学問を提供する環境(入れ物?)であらう。仲間達と一緒に学問を議論する場所も提供できます。大学教員として自分の研究も大事なのですが、学生の長所を見いだし、寄り添い、可能性を信じて、その肩を押すことが今の私の役目だと感じ始めています。

300ページくらいある教科書を90分×15回の講義(大学の授業)だけで理解することはほぼ不可能です。私の場合、中学生から英語を勉強しても、大学生になって少しも英語を話せるようになりませんでした。どこかがズレているなあと感じていました。

いろいろな動き回り、成功すれば共に喜び、失敗しても許されるのが大学教育の醍醐味です。

残念ながら自分の実力の無さに涙する日もありますが(少なからず)、それが私にとっては、それが若さの特権です。また明日から始めれば良いのです。可能性の枠は、大学キャンパスに留まる必要はありません。

最近になって分かってきたことは、高校生と同じように教育を受けてもらえないと思込んでいたのが、大きな間違いであったと気づき、

可能性は無限大

私は理工系教員の一人で、海外性は散らばっていますよ、それを可能性と認識さえすれば。

企業、団体、商店街などの話題や情報をお寄せください
TEL 048・795・9161 FAX 048・653
keizai@saitama-np.co.jp

埼玉経済